

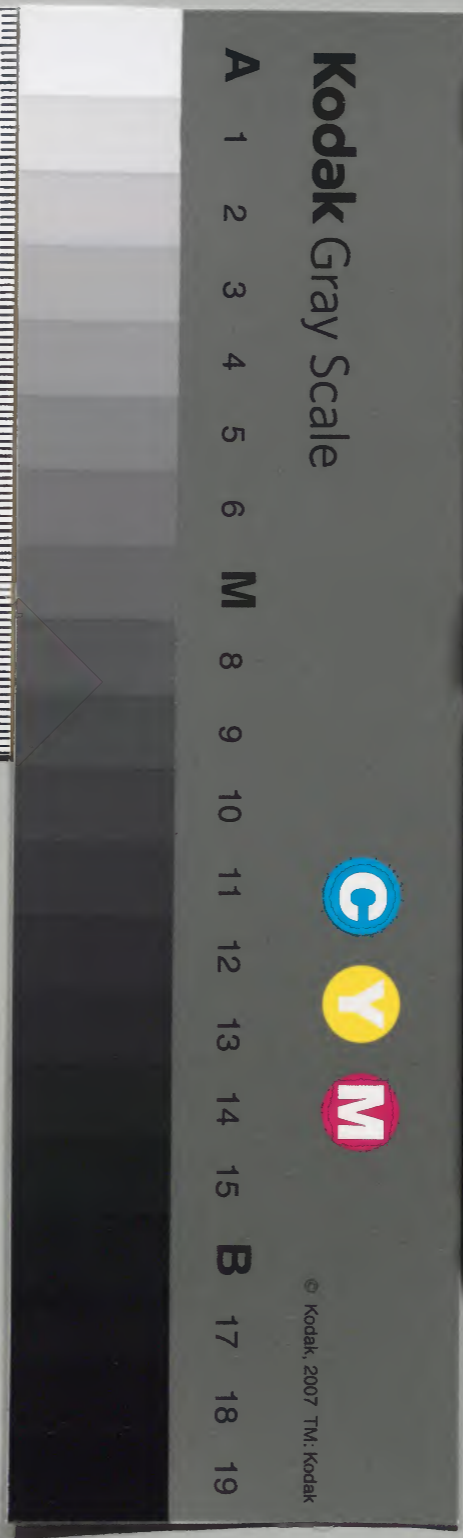
此系明抄

内閣文庫	
番號	和 24894
冊數	3 ( 1 )
函號	203 21

2/

内閣文庫	
二四八九四	和書
三冊	
二〇三函	

203-21



綴じ部(喉部分)の文字等が開きが不鮮明な場所あり

天明抄

上





桐壺

一名壺前栽  
伴景舎

藤壺

飛香舎

梅壺

菽花舎

梨壺

昭陽舎

雷鳴壺

竜芳舎

貞觀殿

弓場殿

光明抄卷中一

自桐壺至未摘花

光源氏物語卷中一

桐壺

いづれの御もふ女御夏衣のしるしは海の  
ゆきやんちのりたきいふあゝぬらうしよきめ  
多うふりしり

いよんち 若くは醍醐帝乃湯子 若くは嵯峨院の中若くは  
きハカシ 藤原の  
権北と云ふ位  
高き人として  
なれと云ふ人  
若くは醍醐帝乃湯子 若くは嵯峨院の中若くは  
若くは醍醐帝乃湯子 若くは嵯峨院の中若くは  
若くは醍醐帝乃湯子 若くは嵯峨院の中若くは

の御は之れをささくせは  
の御は之れをささくせは  
の御は之れをささくせは





皇紀... 重... 同... 也

大下女  
但... 倒...  
媛... 卷...  
賢... 世...

女所事

雄略天皇七年... 雅媛為女所

後漢書云以備內職... 居正位... 宮園同躡天

皇八上女所... 序... 王... 燕寢所... 謂進所... 於王之... 十

一之土周礼云女所... 教王之... 燕寢以... 歲時獻切

更衣事

仁明... 皇... 兼... 和三年... 正五位上... 紉... 乙... 矣

校後四位下為更衣... 漢書孝章云更衣... 為便殿之

園中有寢者便殿寢者... 陵上... 正殿寢側之別

殿更衣之... 史記之外... 戚世之... 衛... 皇... 后... 子... 子... 夫... 生... 微

矣蓋其家號曰... 承... 氏... 平陽侯... 邑... 子... 夫... 為... 平陽主

諛者... 武... 帝... 初... 即位... 數... 歲... 無... 子... 平陽... 主... 事... 水... 諸

注... 時... 於... 軒... 中...  
帝... 權... 主... 衣... 裳...

良家子女十餘人... 飾... 置... 家... 武... 帝... 拔... 霸... 上... 還... 自  
過... 平... 陽... 主... 見... 所... 侍... 美... 人... 上... 弗... 說... 既... 諛... 者... 進... 上... 初... 王... 見  
獨... 說... 宋... 子... 夫... 是... 日... 武... 帝... 起... 衣... 子... 夫... 侍... 裳... 軒... 中... 得... 幸  
上... 還... 座... 環... 甚... 平... 陽... 主... 金... 千... 行... 主... 固... 券... 子... 夫... 奉... 送  
入... 宮... 子... 夫... 上... 車...

立后事

後漢書

周礼云王者立后... 鄭... 注... 礼... 記... 曰... 后... 之後... 在... 夫

三夫人... 夫人... 坐... 端... 婦... 礼...

周礼云夫人如三台... 後... 容... 論... 礼... 九... 嬪... 掌... 教... 四... 德

九嬪以九... 周礼云女嬪... 掌... 婦... 字... 已... 法... 以

教九... 嬪... 也... 四... 德... 謂... 婦... 禮... 嬪... 容... 切... 之... 廿... 七... 代... 婦... 子... 表... 祭... 賓... 容

婦服之... 明... 能... 服... 事...  
父... 之... 廿... 七... 代... 周... 礼...  
代... 內... 著... 之... 物... 尊... 之...  
服... 御... 夫... 夫... 表... 之...

い... 之... あり... 之... 家... 方... 能... 靈... 運...





光原殿  
後深殿  
光原氏三威は着袴  
御を御さしめ

光原氏三威は着袴

光原氏三威は着袴

位者

日吉土書

光原氏三威は着袴

光原氏三威は着袴

光原氏三威は着袴

光原氏三威は着袴

光原氏三威は着袴

光原氏三威は着袴

光原氏三威は着袴

昌子因款王朱准院御母玉女御遊子

女玉御明文彦女母女大臣時平女三歳なりて母

とて

光原氏三威は着袴

光原氏三威は着袴

贈三位源氏清和皇外祖母在山城園愛慕

墓事 見延表式東山浄心寺

光原氏三威は着袴

光原氏三威は着袴

光原氏三威は着袴

光原氏三威は着袴

光原氏三威は着袴

あつねのてんり 後凉殿

みこころのふけり 御をうけさののり

光原氏三歳に著袴

守らめ 坊月之 ちよにこそあはれをすき

位者 日若木書し

あつねのてんり 葉こそ

あつねのてんり ちよにこそあはれをすき

てんり ちよにこそあはれをすき

軍車宣多之 延喜式云把曹司を限夫人及田親日温明は清原殿ノ孫と限合婦三位兵衛と限但女所及孫之太坊妻合兵陣ノ限

相愛更衣卒去事 源氏表三々母とくま

あつねのてんり 昌子因款 朱崔院 中母玉女柳瀬子

女玉信明文立夫母な大臣時平正三歳なりて母

とくま

あつねのてんり ちよにこそあはれをすき

たつねのてんり ちよにこそあはれをすき

贈三位源氏清和天皇外祖母在山城園愛意

墓事 見延喜式 東山浄心寺

あつねのてんり ちよにこそあはれをすき

あつねのてんり ちよにこそあはれをすき

古々 空蝶のちよにこそあはれをすき

あつねのてんり ちよにこそあはれをすき

拾遺

あつねのてんり ちよにこそあはれをすき

かせの

今月のおとまりをくらげにうけとせんとすべし  
いづれかよきとすべし

贈三位車例可考し

女卿とすべしとせしむるにあらざるべし

河内守の女卿とすべしとせしむるにあらざるべし

女卿といふは例なりやとせしむるにあらざるべし

河内守の女卿とすべしとせしむるにあらざるべし

河内守の女卿とすべしとせしむるにあらざるべし

河内守の女卿とすべしとせしむるにあらざるべし

河内守の女卿とすべしとせしむるにあらざるべし

河内守の女卿とすべしとせしむるにあらざるべし

今日得婦人常五位以上内命婦之六位以下女

白外命婦

河内守の女卿とすべしとせしむるにあらざるべし

河内守の女卿とすべしとせしむるにあらざるべし

河内守の女卿とすべしとせしむるにあらざるべし

河内守の女卿とすべしとせしむるにあらざるべし

河内守の女卿とすべしとせしむるにあらざるべし

大般若經云善現當知有女人端嚴巨富若

無強夫所稱讚者易為惡人之所陵辱

月くちしりりそあむくくくくくくくくくくくく

屏風 ともくもあむくくくくくくくくくくくく

なめれあむくくくくくくくくくくくく

一眉 猶也 雙眼定傷人 遊仙歌

如乃知もともしとたうとつらとつらとつらと

つらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと

つらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと

是様  
是様

つらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと

つらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと

つらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと

つらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと

つらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと

長恨新は思き子院のりせは伊勢母貴とらりせ

つらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと

とつらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと

是様  
是様

つらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと

つらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと

つらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと

つらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと

つらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと

つらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと

つらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと

つらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと

つらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと

長徳寺 由來池苑皆依舊太液芙蓉未央柳 芙蓉荷一色

ね月をほほ氏物わたりとくつあまこあふ中光澤

氏物諸とまはる事元の一はし物色又大監物

光行の家よりほろろ字申じりて法信の侯

みさうりらさめまふ 人のまろひとたを

けせのれり多け致ととむらためお物

朱り難字致ほきいをもつてくわあふ

似たり故實人あさうらむしりてそそそ

の亭にまうりむくひとけ事を讀むによし

申しおとらもいふ若くころらう福め

不の事あふとくつ常幸お切とくつ

とくつあひとそくつはるをらふの親約ひく日

かきと安三宗の本相巻巻成びとそれ

繪りかけあなふきひれさうらひとそ

こつとそそそそそそそそそそそそ

きいそそそそそそそそそそそそ

あふの柳とそそそそそそそそそ

とら親れとほらひとと申すもそそ

把とそそそそそそそそそそそそ

わろそそそそそそそそそそそそ

あふのそそそそそそそそそそそ

わろそ細の傳やと申すありとそ

はふそ自由のそそそそそそそそ

け一とそそそそそそそそそそそ







拾遺書九之源重く、母あはれありにゆふ系  
ひるふのあつらふるのかりてゆく事ゆえきこの  
あひあはれをきぬ事とひひをあはれしか 祖母  
の女のふらふ 想やれはやくともまはるゝ火といひて  
ふらふまはるゝ子れおんいあはれぬいふりりり  
あつらふるはつらひゆきとていふ

光源氏御遺書始中

つらやのほかへんといふ物あつらふるまことこふえの  
あつらふるはつらひゆきとていふ

箏 附 箏 頷 篇 云 頷 紳 及 俗 之 象 乃 古 度 形 似 瑟 而 短 有 十三 絃

琉璃 横 笛 律 書 樂 圖 云 音 歎 和 名 手 古 不 江

本出於羌也 漢張騫西域傳一曲

ふらふといふはつらひゆきの中かかこふまはるゝをいふ  
あつらふるはつらひゆきとていふ事ハ字多ゆきの心はしめ  
あつらふるはつらひゆきとていふまはるゝをいふ事ハ  
はつらひゆきとていふ

寛平の送滅云外蕃の人必所見者在唐中  
見し不可直對其李腰朕已失之悔之臨臚鼓  
ハいふれよはつらひゆきとていふ事ハ異國人未期、時停九重しお  
入於此所有問答 漢書云臨臚寺周礼大  
行人中右史掌大賓之礼及大客之儀亦行人也史  
掌那國賓客之礼

はつらひゆきとていふ 和相之まわり國をさむる子相とていふ





二寸入りりとこふて  
ちかき條はもとよりたのこくはほのせり  
ちかき条はもとよりたのこくはほのせり

雅形は... 三善他忠元服 徳宣

しとひは... ちかき条はもとよりたのこくはほのせり

ちかき条はもとよりたのこくはほのせり

大田時... 南殿... 居指...

再拜次右左次右左  
今葉... 次再拜次置易於地立右左

次右左次取易居指退か... 内院儀他而  
只再拜退か

ひたり... 左馬寮門馬... 給なす... 必唐の親合後風

ちかき... 長食... ちかき... 祿唐樓

源氏君土蔵葵上十六歳女乃は辛巳に記... ちかき

ちかき... ちかき... ちかき

源氏君土蔵葵上十六歳女乃は辛巳に記... ちかき

この殿の御しりしをばはるる事七人しりし  
てみりしめりたるものもあはれ

此工修理工司由しはるの殿ニ奉院ニ奉  
文源氏物語卷ノ二

第 五

敷慶親王

孝子院中曰り子母宣太后文温子

延喜四年二月廿二日

玉文宣好色を襲負人之延喜八年二月廿二日

かくろしと治事し 其のたは治事也 治事又詔旨

かしののりか將 英明中物交野ノ家ノ事

まのふのりかやさうし りひきし

かすのりか かすのりか

かすのりか かすのりか

わさく

わさく わさく

わさく わさく

わさく わさく

わさく わさく

わさく わさく

わさく わさく

わさく わさく

わさく わさく

わさく わさく

わさく わさく

わさく わさく



あはれもくはめりひきをもあつあつするふり

難なり 譯也

ははれくまらばはれくまらば 貞也

むさくまらばいさくまらば

無負相 色人女 在色家

あはれめり 漢讀 ありくはれ

ひさくまらば 永

あはれめりくまらば ありくはれ

あはれめりくまらば ありくはれ

掃

あはれめり

山里めりくまらば ありくはれ

あはれめりくまらば ありくはれ

あはれめりくまらば ありくはれ

あはれめりくまらば ありくはれ

あはれめりくまらば ありくはれ

あはれめりくまらば ありくはれ

後漢書云周礼曰王后立后 鄭玄注礼記曰后之言後也

雜書云 西京名号ありくはれ

あはれめりくまらば ありくはれ

あはれめりくまらば ありくはれ

黒鳥子三奇 ありくはれの者の海邊に 俗云 ね付

ありくはれ 嘯 出 口 一 萬葉守の家持あり

ありくはれ ありくはれ ありくはれ

みづうにえあふりしむるま

道徳の備りてあつてあふる徳成りあふ

くしと將之。 徳りたまき。 良し

ゆかああ舟のうきうきあふりしむるま

歡身岸額離根草論會江額不繫船

ひらののじりのかしわうあれをせふあふりしむるま

輕くひちあふりしむるまあふりしむるま

又ひれいありしむるまあふりしむるま

あふりしむるまあふりしむるまあふりしむるま

收時く 五雜く くらんるる

あふりしむるまあふりしむるまあふりしむるま

あふりしむるまあふりしむるまあふりしむるま

あふりしむるまあふりしむるまあふりしむるま

あふりしむるまあふりしむるまあふりしむるま

法師く 未だ入賜く

あふりしむるまあふりしむるまあふりしむるま

真帆く 物然く 自然く

あふりしむるまあふりしむるまあふりしむるま

あふりしむるまあふりしむるまあふりしむるま

あふりしむるまあふりしむるまあふりしむるま

あふりしむるまあふりしむるまあふりしむるま

臨時のまうらぬ個樂のうま月中の午日候あふ

てあふりしむるまあふりしむるまあふりしむるま

昔ハ三十四日今ハニケ田山陣にて堰屋あふりしむるま



東  
其盤

て甚盤に多御食を以て幼益を乞ふが如  
の竹時の子と水陣しつ子南父を云

まうりわくうきこあらめく

頌

けきりあけり

西身

けきりあけり

直法

うまふたりひいむらりあきあきのあ

ふいひひきしんせりあきあきのあ

ふいひひきしんせりあきあきのあ

あきあきのあ

あきあきのあ

あきあきのあ

あきあきのあ

地あふあけり

あきあきのあ

あきあきのあ

あきあきのあ

あきあきのあ

あきあきのあ

あきあきのあ

あきあきのあ

あきあきのあ

あきあきのあ

あきあきのあ

筆をえりあきあきのあ





その女を志して

月出らるるを

あつたのさうをく

楚草 楚草 楚草 楚草 楚草 楚草 楚草 楚草 楚草 楚草

楚草

雑事

いふのあつた

いふのあつた

いふのあつた

いふのあつた

いふのあつた

論説 知者不言 未必愚之 大辯如訥 蒼生

三史 史記 漢書 後漢書

三史 史記 漢書 後漢書 尚書 礼記

三史 史記 漢書 後漢書 尚書 礼記

三史 史記 漢書 後漢書 尚書 礼記

楚原 懷王 三國 史記 尚書 礼記

楚原 懷王 三國 史記 尚書 礼記

楚原 懷王 三國 史記 尚書 礼記

楚原 懷王 三國 史記 尚書 礼記

楚原 懷王 三國 史記 尚書 礼記

楚原 懷王 三國 史記 尚書 礼記

楚原 懷王 三國 史記 尚書 礼記

楚原 懷王 三國 史記 尚書 礼記

とわすはるる人等醉たはは花糖を食ふ  
るの尾原はゆる物冠戴ししぬ流者ふもの  
衣袋をかへ漢文云浪水たのへ我廻と  
まらるる命浪浪のふふあへ我は浪浪  
尾原我負取入る世成去ふあし  
こくらの座よりあつむ尾原毒にたけと  
是日てしふさもくのひりつて我備ふ多の  
尾原若く云測のなるふ體あけりて我食  
とるもふ女飯を茅柴をけりてあてのいし  
ふくまりあへく九月あ我むもてふ測ふ  
たふら新あけりれりる心我あけりて  
三女  
まらむじとあつて妻ゆあのをたてに座り

わくわくのちりきさやらのあつてむい  
こくしりりし

九月廿七日  
詩のつとを

月令云 重陽日白菊黄也

周易云 天殺九秋殺九相 仍曰重陽

淮南云 糟景尔長房つとるる云こたぬ月

九日小つとるる下 速あて去るが人我

とるるあぬあをるる草草を入るるあ

あける高所より登て菊を食のみ日けし

て居てとつとるるれりる一のまにりて

久しとるる家此四り 猪 鶏 犬 牛 羊

一時入る死入る



もくしんせいのこころの中ふとてあまのこころ  
とやほちあまのこころのこころのこころのこころ  
あまのこころ

あまのこころのこころのこころのこころのこころ

直衣のこころのこころのこころのこころのこころ

くみとらん 少し様とせ

のこころのこころのこころのこころのこころのこころ

こころのこころのこころのこころのこころのこころ

きあれたあまのこころのこころのこころのこころ

くみとらん まりともと かーこころのこころ

和加侯戸は少波利懐枕多礼を為兼枕に交  
美文一石世先已名世先英以枕不奈当在由而

安波比た多やかふ分先安波比た多やかふ分先

ふらあ好たやまのこころのこころのこころのこころ

ふらあ好たやまのこころのこころのこころのこころ

ふらあ好たやまのこころのこころのこころのこころ

ふらあ好たやまのこころのこころのこころのこころ

ふらあ好たやまのこころのこころのこころのこころ

ふらあ好たやまのこころのこころのこころのこころ

ふらあ好たやまのこころのこころのこころのこころ

ふらあ好たやまのこころのこころのこころのこころ

ふらあ好たやまのこころのこころのこころのこころ

ふらあ好たやまのこころのこころのこころのこころ

あつてはうらやまのたふさふさ  
うらやまをぬかしてはせとらうと  
又かきかへ一紙のらびり  
あつてはうらやまのたふさふさ  
あつてはうらやまのたふさふさ

うらやまをぬかしてはせとらうと  
あつてはうらやまのたふさふさ  
あつてはうらやまのたふさふさ  
あつてはうらやまのたふさふさ  
あつてはうらやまのたふさふさ

あつてはうらやまのたふさふさ  
あつてはうらやまのたふさふさ  
あつてはうらやまのたふさふさ  
あつてはうらやまのたふさふさ  
あつてはうらやまのたふさふさ

あつてはうらやまのたふさふさ  
あつてはうらやまのたふさふさ  
あつてはうらやまのたふさふさ  
あつてはうらやまのたふさふさ  
あつてはうらやまのたふさふさ  
あつてはうらやまのたふさふさ  
あつてはうらやまのたふさふさ  
あつてはうらやまのたふさふさ  
あつてはうらやまのたふさふさ  
あつてはうらやまのたふさふさ

光源氏物語  
空蟬



同云 蓋乃馬と事之例ありや 答云 乃馬

乃馬と云ふは物にあり 馬

其の蓋より云ふのつかひ 同並菊室 例

此ふやこのみくらねしきまはるしき車に云ふ

乃馬と云ふは月夜を言ふ我せおののぼる

乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬

乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬

乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬

乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬

乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬

乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬

乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬

乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬

乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬

乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬

乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬

乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬

乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬

乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬

乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬

乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬

乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬

乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬

乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬と云ふは乃馬







三編明神  
序

三山しき

人々をとりて之の事よき事とせしむる事  
又さうして事一たる事よき事とせしむる事  
さうして事一たる事よき事とせしむる事  
さうして事一たる事よき事とせしむる事  
持名の事とせしむる事  
三編明神の  
知るるの事とせしむる事  
三編明神の  
三編明神の

集候之迷人格君是真色迷人應過世及真付候俱  
迷人之心思候貴真孤女牧客松後一廻夕

建人眼女為孤媚害則深日長月長溺人心

松之穂之農之頃

あるるの衣の月衣ぬののとも也

朗 八月九月正長松平聲方聲之止時

礼記月令云

季夏蟋蟀居壁 墮菴家音始礼敬眼草

葉初開 菅原万葉集

秋きあひるの冬もくぬはくそ

額家之 智首也

さうして事一たる事よき事とせしむる事

當来道守師就勤慈尊 是尺与の内代

五十六億七千万歳候話勤候代子始と佛信





八月... 霞組 友離日

在撰 年... 思於七... 此... せら... 此...

中子... 此... 此...

上庭... 此... 嘔病...

此仙 兒近... 不微

此... 此... 此... 此...

葬送... 念佛事

無言念... 此... 此...

佛經供養... 此... 此...

此... 此... 此...

此... 此... 此...

此... 此... 此...

此... 此... 此...

此... 此... 此...

此... 此... 此...









花のむらりつてみれば山の梅はまゝに成りけり

里はるかかえりぬ城は川の山の梅はまゝに成り

多しをばかこみいとせり名をてはゆめ 能恒

強者方こ 梅はこ

かりきせトシとせし 加持しあてにけり

あつこのはれけり

山下初山上初疑名可奉 誰知中有路船折道

巖 山巔 文集決真寺詩

病き後や志は山流のつらぬきうらうらたそかきや

洞云はありのやいほくさうき 蒼云出

たまあふてはらわらうとゆる鶴馬寺あしや

うきあふてはらわらうとゆる鶴馬寺あしや

うらうらあふてはらわらうとゆる鶴馬寺あしや

かこつてうらうとゆる鶴馬寺あしや

らあふてはらわらうとゆる鶴馬寺あしや

わふのうらうとゆる鶴馬寺あしや

うらうらあふてはらわらうとゆる鶴馬寺あしや

あふてはらわらうとゆる鶴馬寺あしや

はらわらうとゆる鶴馬寺あしや

ゆる鶴馬寺あしや

申給ふりけりまゝに及國の人まもるゝあふ

きあふゝあありあひあふのあかくえあふ

うひあひあかくえあふのあかくえあふ

去中將仁受領例事

藤原実方朝長西元

年正月十三日 去後を中納言藤原守別 還昇長保

元年正月廿六日 皇宮御座車中 御座を

皇宮御座車中 御座を

皇宮御座車中 御座を

皇宮御座車中 御座を

皇宮御座車中 御座を

皇宮御座車中 御座を

皇宮御座車中 御座を

皇宮御座車中 御座を

皇宮御座車中 御座を

皇宮御座車中 御座を

皇宮御座車中 御座を

皇宮御座車中 御座を

皇宮御座車中 御座を

皇宮御座車中 御座を

皇宮御座車中 御座を

皇宮御座車中 御座を

皇宮御座車中 御座を

皇宮御座車中 御座を

皇宮御座車中 御座を

皇宮御座車中 御座を

皇宮御座車中 御座を

皇宮御座車中 御座を

皇宮御座車中 御座を

皇宮御座車中 御座を

皇宮御座車中 御座を

皇宮御座車中 御座を

皇宮御座車中 御座を

皇宮御座車中 御座を





申すものなり

いさよのれいし衆  
わしとけいふみるのがさともさなほなるのりる浪久  
あしとけいふ事すいすふ浪の志しあきりる事  
やれあえけし

人なれはあしとけいふ事すいすふ浪の志しあきりる事  
あしとけいふ事すいすふ浪の志しあきりる事  
あしとけいふ事すいすふ浪の志しあきりる事

あしとけいふ事すいすふ浪の志しあきりる事  
あしとけいふ事すいすふ浪の志しあきりる事  
あしとけいふ事すいすふ浪の志しあきりる事

人の僻事とくはあしとけいふ事すいすふ浪の志しあきりる事  
あしとけいふ事すいすふ浪の志しあきりる事  
あしとけいふ事すいすふ浪の志しあきりる事

あしとけいふ事すいすふ浪の志しあきりる事  
あしとけいふ事すいすふ浪の志しあきりる事  
あしとけいふ事すいすふ浪の志しあきりる事

あしとけいふ事すいすふ浪の志しあきりる事  
あしとけいふ事すいすふ浪の志しあきりる事  
あしとけいふ事すいすふ浪の志しあきりる事











此の如くは水小なる乃くふくをぬけて乃く  
流して無くするに笑よりより流るありらむは  
あはれくとも事流るはあはれくとも事流るは  
我よりより流るはあはれくとも事流るは  
平仲文書より

景月抄卷子二

自紅葉矣至花散里

光源氏物語卷中四

詠多賀

多賀の如くは水小なる乃くふくをぬけて乃く  
流して無くするに笑よりより流るありらむは  
あはれくとも事流るはあはれくとも事流るは  
我よりより流るはあはれくとも事流るは

わがこころは水小なる乃くふくをぬけて乃く  
流して無くするに笑よりより流るありらむは

桂殿近初哉 桐楼媚早年 昔は梅樹下

蝶夢盡深邊 去海波は旅の小野 望水

源流沖時平初 今昔夢

青海波沖時平初 今昔夢

とめの下初衣 西の宮 表衣 表衣 やまはと衣 表衣

うきあひの表衣 表衣 りく 表衣 の 表衣 せん 表衣 表衣

わが 表衣 小 表衣 志 表衣 ころ 表衣 表衣

表衣 表衣 表衣 表衣 表衣 表衣 表衣 表衣

あはれ 表衣 表衣 表衣 表衣 表衣 表衣 表衣

あはれ 表衣 表衣 表衣 表衣 表衣 表衣 表衣

あはれ 表衣 表衣 表衣 表衣 表衣 表衣 表衣



のくをふ 頌也 ともいふわふ 對屋に

ましあちまい ちうちうちうちうち

政所の 家因に

今あるうらつてあやせまう ながるるまう

たん ちうち ちうち ちうち

かみいん ちうち ちうち ちうち

卯申のちうち ちうち ちうち ちうち

卯申毎服三月申

紫と今日除服の ちうち ちうち ちうち

たふまう ちうち ちうち ちうち

いほめま ちうち ちうち ちうち

ちうち ちうち ちうち ちうち

追儺ナヤラフ文選 婦人、儺服而

立作階 孔雀圖儺驅疫鬼 忌鷲先祖及朝立作階 作階痛泣

天子年二 八朔 民八春三月年二

うま ちうち ちうち ちうち

葵と源氏君が 四ヶ年 ちうち ちうち ちうち

ちうち ちうち ちうち ちうち

さきいん ちうち ちうち ちうち

うらつてあやせまう ちうち ちうち ちうち

口ま ちうち ちうち ちうち

相無音あふひの巻 ちうち ちうち ちうち

あきいん ちうち ちうち ちうち

あきいん ちうち ちうち ちうち

白雲之極高磨二期言は殆不可及之極 付字五し 中不ヨム

花ふさまむとわらふ花をふいさきふりし結成は

こころのまきしこころのまきしこころのまきしこころのまきし

つらぬるいふれとくちよとわむて

境をふいあふ旅のまきまきしこころのまきし

あふさくのまきまきしこころのまきしこころのまきし

いせれわらあふまきまきしこころのまきし

内ふれおと申乃りまきまきのたふれととあふせまきまき

見きてふいさきしこころのまきし

平初ふら筆程とこふけてあふれと

ゆつたまふれとゆまのゆつたまふれとゆまのゆつたまふれと

あふさくせりとあふ物あふさくせりと

長保樂繼保曾言久世利候利夜頃 古樂也 大会詞

くうくうあふらあふ 柏子しこころのまきし 騷 駢し日記

ゆつたまふれとゆまのゆつたまふれとゆまのゆつたまふれと

あふさくせりとあふ物あふさくせりと

くうくうあふらあふ 柏子しこころのまきし

あふさくせりとあふ物あふさくせりと

法をつらしこふれと童頭なる世文は名中衣の

御衣成結とくちよとわむて

内とありわら 難意し

まなれと世成り記結とくちよとわむて

なすめあふさきこころのまきし

ゆつたまふれとゆまのゆつたまふれとゆまのゆつたまふれと



かきりありしきりしきり

昔衣はもとこし へりり 睡へ 逸高睡

とむれをいふまのいぬまは

か海あもれ杜乃下草か、ぬ道訪しきまめあかま

りりしきりしきりしきり

いまもねくやりにあるか海あしきの杜しを夜のう

もいしきりしきりしきり

ふふと首かき杜橋ありぬらまをほりりまを

にくかぬ人せしめさきめ成したちりりまを

ぬくかぬ人のまをまをぬまをぬまをぬまをぬまを

んまをぬまをぬまをぬまをぬまをぬまをぬまを

ぬまをぬまをぬまをぬまをぬまをぬまをぬまを

かきりありしきりしきり

ぬまをぬまをぬまをぬまをぬまをぬまをぬまを

ぬまをぬまをぬまをぬまをぬまをぬまをぬまを

温明殿

うりはらたや志かまとしきりしきり

山志るれあはらりりりりりりりりりりりりりりりり

かまをさいるやいふせんじきしきりしきり

あまや志あましきりしきりしきり

さいりるや 催馬楽山城三

文着といひまじ昔の人とがなかくしきりしきり

とくまりしきりしきり

史記之夏時卓王孫有女文君新寡好音故相

如錦夕令相重而以琴心排之相如之既却後車

騎崔容回甚弄琴文君竊後戸窺之心說思  
不得當之既異相如及使人童賜文君侍旨通  
慙慙文君已奔相如

君あつたを後志のいふふうたひくあちちうは  
うとひひひてきませとくらうとらう

借来あつたを後志のいふふうたひくあちちうは  
うとひひひてきませとくらうとらう

紅乃おめれ衣あつたふとてうふとらうとらう  
うあもあつたうとらうとらう

あつたの地をうとらうとらうとらう  
まことふじを世中といひありとらう  
文集 官途後け長蛇世事自今口不言  
とふ乃心なるとかふみふとらうとらう  
いぬらとらうとらうとらうとらう  
うとらうの十月ふとらうとらうとらう

藤壺女卿 是帝 日女美 超公徽殿女卿 三喬大相国女 朱荏院女  
立后奉 後漢書周礼去王者立后 鄭去后礼記云后言 殿言在夫後之終女 謂後達



白くふきしりのくさる

清きよきにはとつ子常事也

おろからるることもあきして

お月もあつたやうに

て此をせむるよりこそぬきぬかのおろ月影にちゆをき

冬集 不明不暗 脚月 冰 暖 帆 寒 湯 風

冬後三月終

つとあきしり 周章之

はれは成まきくつてをりくくくぬふあはつて

あきふらせれやうたあふくやうふぬふよら

くてあきふらせれやうたあふくやうふぬふよら

とてあきふらせれやうたあふくやうふぬふよら

おろからるることもあきして

おろからるることもあきして

おろからるることもあきして

忠に公良房清和伊予貞友友年 歳七十九 貞信 忠平

宇多 醍醐 朱雀 村上 已上 代

村とは宇大唐三年 歳七十九

おろからるることもあきして

強し

おろからるることもあきして

新 物師

おろからるることもあきして

おろからるることもあきして

おろからるることもあきして



宗祇登二幸祇立之出候定二皇子保姫命

三之文乃川乃川乃川乃川

乃川乃川乃川乃川

乃川乃川乃川乃川

乃川乃川乃川乃川

乃川乃川乃川乃川

乃川乃川乃川乃川

乃川乃川乃川乃川

乃川乃川乃川乃川

乃川乃川乃川乃川

乃川乃川乃川乃川

乃川乃川乃川乃川

又所覺藏人所信候其後遺候院

大將乃川乃川乃川乃川

乃川乃川乃川乃川

乃川乃川乃川乃川

乃川乃川乃川乃川

乃川乃川乃川乃川

乃川乃川乃川乃川

乃川乃川乃川乃川

乃川乃川乃川乃川

乃川乃川乃川乃川

乃川乃川乃川乃川

乃川乃川乃川乃川

しとたまふおれ入らしむる物も人後たる便

人路之びとたすいといふ車と云ふに在り盛況

あらしうと云ふおれおれと云ふに 欄こて下

けりくまふあつ海にやけりといふと云ふに

されくまふをり川舟と云ふに志しあつ船と云ふ

大おのりおれといふ人敵上のせしむるおれと云ふに川

乃事おれおれと云ふにさき御幸と云ふおれと云ふに

りおれをり人のさきつと云ふに御幸と云ふに

侍女子の  
おれと云ふ

右将尉行旅の時一頁府官供奉し不例のかりめ

隨身のうらと云ふおれと云ふに

川にさしおれと云ふに

市女のおれと云ふに中ゆいりおれと云ふに

おれのおれと云ふにおれと云ふに

おれのおれと云ふにおれと云ふに

曆博士

おれのおれと云ふにおれと云ふに

おれのおれと云ふにおれと云ふに

おれのおれと云ふにおれと云ふに

おれのおれと云ふにおれと云ふに

おれのおれと云ふにおれと云ふに

おれのおれと云ふにおれと云ふに

おれのおれと云ふにおれと云ふに

おれのおれと云ふにおれと云ふに

おれのおれと云ふにおれと云ふに

おれのおれと云ふにおれと云ふに

あはれなるやうき

あはれなるやうき

あはれなるやうき

あはれなるやうき

あはれなるやうき

あはれなるやうき

あはれなるやうき

あはれなるやうき

あはれなるやうき

あはれなるやうき

あはれなるやうき

あはれなるやうき

あはれなるやうき

あはれなるやうき

あはれなるやうき

あはれなるやうき

あはれなるやうき

あはれなるやうき

あはれなるやうき

あはれなるやうき

あはれなるやうき

あはれなるやうき

あはれなるやうき

あはれなるやうき



行雲暮為行雨

夕暮ハ多ク見ゆつてさうたあめ降るうもろき山嵐ありて  
霽賤ハは落葉而流枝宿神宇し考し映雲  
夜投し遇悲れ堂隅を迷獨放於秋を  
月之時あり

神皇月つれも時由ゆりともかゆゆはたけらまきり  
者うら山嵐をるやうま出くるる

白雲の九重に川流多しは雨をともひらひあり  
けしき心志ありてあけしあかりし人あはれは下り  
あつてもつ降ふからをいひかきし

ふりれはあけきりてあけきりてあけきりてあけきりて  
あけきりてあけきりてあけきりてあけきりて

ハ秋ハ多しは雨をりてあけきりてあけきりてあけきりて  
あてきりてあけきりてあけきりてあけきりてあけきりて  
あてきりてあけきりてあけきりてあけきりてあけきりて

あてきりてあけきりてあけきりてあけきりてあけきりて  
萱草多し黄いろもるる雨のあて服者着て

又思汗衫あせまき

とくはあけきりてあけきりてあけきりてあけきりてあけきりて  
あけきりてあけきりてあけきりてあけきりてあけきりて

長恨 北窓多し瓦冷霜花白 舊柳故今衣誰と共  
あけきりてあけきりてあけきりてあけきりてあけきりて



内将たるものし中野らもあはれしを  
あはれしに年もいふ事なきあはれし  
と業新き年といふ志すふ。カカうぬらるるあはれ  
ふとくははれしとく

卯亥祭 施祭 乙亥

善き四つと月はえと風はまじりけ  
庶あ〜りあふと百集れまきめれあふ

光徳氏物語巻第七

買ふ

赤ま乃あふりちくちあふりま  
赤も目とわやふりてくろく

買ふ  
以初中宮を光徳氏に廿二の月を  
廿二の月を光徳氏に廿二の月を

赤ま女子下向例 赤融院印時赤ま規子女

玉伊勢一あふりちくちあふり赤子女王も具つてあふり

くあふりちくちあふりちくちあふり号赤子女も具つてあふり

けあふりちくちあふりちくちあふり赤子女王も具つてあふり

赤ま自信云忠平公女之 赤雀院印時 永平六年九月

為赤ま由京し後天曆二年十一月入内国三年

四月為あふりちくちあふりちくちあふり赤子女王も具つてあふり

赤ま為あふりちくちあふりちくちあふり赤子女王も具つてあふり

あふりちくちあふりちくちあふり

大庭の園へ月浪のうきうきか〜の松城あふりちくちあふり

いあふりちくちあふりちくちあふり赤子女王も具つてあふり

婦乃くちあふりちくちあふりちくちあふり赤子女王も具つてあふり





大将喉因時近洛夜行申事

~~~~~

此のりも大なるけ事このころのさるをさつらん

伊勢

~~~~~

いづつりさつりあつてあつて世もあつてま

~~~~~

院乃あそりの流るる一物のみあつて

~~~~~

けあふ哉集りし後頼あつて

乃世のりんのもつじめあやうふあつて

威丈人越王如意母の漢祖后呂太后最死威丈人及

其子趙王囚威丈人断手足去眼焯耳飲蔣藥

使廁中令曰人矣 史記呂后 本記

よみのりれあつて

夜居傷之身居の一問もあつて

~~~~~

おれさつたなるさつて 毛詩云白圭は玷尚可

磨之斯言し垢を不為人け字とあつて

娘の顔も又さつて

雲林院の本傳れし難言の仁明てあつて

あつてさつて

といふに收教之をこし後河願寺が成天

曆所時實僧勉別當成給以教を成達

より依勅強兵竹又在臺強平平親音像

年西七十五  
南七十三

而いひせの中其つるまことわめりても成る人

を成と知りあらはれりあふりし其月五けあけし

つれあふりて戸つふりてくくことありし

あはれをたれり乃月八日人をもあけり

おとくをたれり世りし其律師のいふたれん忠少く

念仏と志平中人あふりしつらあふりしあひは

教を奉奉経云無量壽佛有八百四十相一相

各有八百四十隨願好一彼有八百四十光明

二文明遍照十方世界念佛衆生皆取不捨

からやとわたりし事分院わたりし若者いふこと

いふに乃志つのとてまはらば道者我のまはらば

乃くいふゆりし事くくくくくくくくくくくく

ちりき世れりいあふりし事くくくくくくくく

あふりし事くくくくくくくくくくくくくくく

六十卷といふ文くくくくくくくくくくくくく

或いふに天台三千年事

年書廿卷 去義十卷 文の十卷 止観十卷

未書廿卷 尺の十卷 院記十卷 弘史十卷

たれをいふあふりし事くくくくくくくくくく

生れりし事くくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

眼を要用車

あられもくさくさ

さらさらつらつら

かきかきいひいひ

あつあつ

史記 富貴不富 故曰如衣飾 夜行

とあつあつ

漢書 白虹貫日 昔荆軻 暮燕丹 義白虹貫日 而太子畏

虹 蜺主日 蜺 蜺 明 蔽 寒 政 在 臣 下 蜺 日 感 于 朝 君 上 後

漢書 許節云 貫於屬

わらわら

人のさかじり

山姥

月の物

あつあつ

伊大

あつあつ

玉軸 表紙 綴 収 眞 志

きんぎょ

即使随仙人 德鑑於不須 採薪及草蔬 以時恭敬

法を

山

名

子

黒方 冬 薰物





進仰事 其代官出所以先内并奏事し中  
付内侍不因日以後或若進五位上曆名帳事  
或式之五位上曆名帳每年正月侍叙位官所奏  
因襲字一通進古改官

千人りとのありていふは 一入當平御之  
さけいさ地乃いさひ

ひるふとふりとのひやうあふ地もいさ  
古 者あさくおさく務まをむのあつはさり

みまきれこまうていあぬと 御封之  
たのわいもあつていさひさるあつさま

物くわいあつていさるあつさま  
後二位藤系細良世七月十九日任左大臣十二月

後改を改るは時致仕上表事 寛平八年 辰酉

古 上表致仕詔許七十四号致仕大臣日昌泰三五

土月分薨七十八漢蓋相岸賢地節三年以老  
高き腕運五致仕日覺始

いさ秋のいさる 善秋御漢柱之  
いさういさるは 標額 今事

古詩顔字成りきたり向未字成りきたる  
顔字成何文字を推して略すよとら

あつてもあつていさるは 集之  
あつてもあつていさるは 古集之

ひる右い海やいさるは

在者著虎の人りささる我のきこり 千載

めききのぬ人のきこり 敬談文字

くいのききのゆきひんりり きん

魂を預け葉神春神賀 流産蕭蕭入夏

あきこりぬいしきこり

たきこりぬいしきこり たき

つたきこりぬいしきこり つた

つしぬいしきこり つし

あきこりぬいしきこり あき

あきこりぬいしきこり あき

つゆきこりぬいしきこり つゆ

あきこりぬいしきこり あき

あきこりぬいしきこり あき

あきこりぬいしきこり あき

あきこりぬいしきこり あき

あきこりぬいしきこり あき

あきこりぬいしきこり あき

あきこりぬいしきこり あき

あきこりぬいしきこり あき

あきこりぬいしきこり あき

あきこりぬいしきこり あき

あきこりぬいしきこり あき

いしこころのよめさるるをかりせぬ可し  
かくれおのりてゆかま  
如世思之  
おきさふからぬろくせらる  
惟峰

光澤氏物成 卷子八

花散里

しりししぬうかきぬえとさふつら金山のり  
ゆきしとあられととさきり

かこころをよめさるるまきまきしりしとさふと花あひし  
花ちくさの梢もさるるあひしと垣跡もさるる  
はらふよとらぬそとらるる  
ちらぬあらし花のちりるる  
難高  
白ひ

梅乃大成るつりし時きからしつらぬいとあま  
いふまうしとわかしとあひし初ふららとさるる  
わかしとあまかしと都さしとさるる





